

大学生の目標階層に関する探索的研究

伊藤 忠弘

目 的

動機づけに対する社会的認知研究からのアプローチでは、個人の願望や欲求も目標として認知的に表象できるという立場をとる。認知的表象としての目標が活性化するとき、私たちはその目標に向けて動機づけられる。認知的表象として目標を捉えるメリットの1つは、人が複数の目標を同時に持っていて、状況によって異なる動機づけに基づいて行動しているという現実の様子を説明できることにある。状況によってその人が保持している複数の目標表象のどれか1つが活性化されるとき、人はその目標の達成に向けて行動をする。これらの目標は一貫していなかったり、ときに対立しているように見えることもある。しかし目標表象を仮定することで、人が対立して見える目標を同時に持ちうること、状況に応じて矛盾する行動をとること、さらにはそのことに何ら矛盾を感じないことを説明することが可能になる。

目標に対する社会認知的アプローチでは、目標だけでなく、その目標を達成するための手段もまた認知的に表象されると仮定する。目標を達成する手段は1つとは限らないが、過去に目標達成に有効であった手段や頻繁に採用されている手段は目標と強く連合する。この仮定に従えば、ある目

標が活性化すると、その目標と連合する手段としての行動も同時に活性化されることで、目標達成に向けた行動が開始される。何らかの理由でその手段の採用が困難な場合には、当該目標と連合し活性化している他の手段が採用されることになる。

このような目標—手段関係は抽象性の異なる概念間の階層的関係として考慮することができる。上位の抽象的な目標を達成するための下位の具体的な手段は、さらに下位の具体的な手段によって実現される目標となる。例えば、医者になるために医学部に行く人にとって、医学部に合格することは医者になるという目標の手段である。一方で医学部に合格することを目標として、予備校で勉強することや家庭教師に教えてもらうことをさらにその手段として考えることができる。このように複数の目標と複数の手段が階層構造をなして表象されていると仮定した場合、この階層構造のあり方によって動機づけがどのように異なるか、あるいは現実の様々な動機づけをめぐる現象を目標—手段の階層構造によっていかに説明できるか、という問題を設定することができる。

Kruglanski, Chernikova, Babush, Dugas, & Schumpe (2015) は、3種類の単純かつ基本的な目標—手段間の階層構造を指摘している。このうちの1つである等終局性 (equifinality) は、1つの目標を達成するために複数の異なる手段が存在している状況に対応する (図1)。例えば「体重を落とす」ためには、「散歩する」、「運動する」、「禁酒する」、「甘い物を食べない」といったやり方が考えられる。ある手段は他の手段によって代替可能である。また目標達成に複数の手段が存在するとき、目標の達成可能性の見積もりが増加することで、目標自体に対するコミットメントも増加することが指摘される。その一方で、目標達成の手段が1つしか存在しない状況と比較すると、1つの手段に対する依存傾向は減少する。さらに当該手段の目標達成に対する有効性の知覚も減少するという希薄効果 (dilution effect) が生じるとされる。

もう1つの複終局性 (multifinality) と呼ばれる関係では、1つの手段

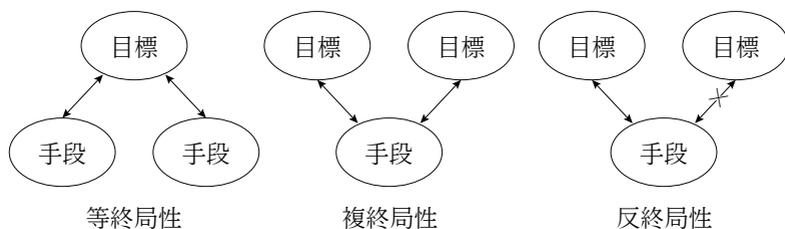


図1 目標手段階層関係

が複数の目標と結びついている構造をなす（図1）。1つの手段を実施することで2つ以上の目標の達成に寄与するという、いわば一石二鳥という状況に対応している。Kruglanski et al. (2015)によれば、目標の価値が累積されることによってこのような手段の重要性は高く評価される。しかしその一方で1つの目標とだけ結びついた手段と比較すると、当該目標の達成にどのくらい役に立つかという手段の道具性の知覚が低くなるという希薄効果が生じるとする。

Zhang, Fishbach, & Kruglanski (2007) は、例えば「トマトを食べる」という手段を2つの目標（「心臓のガンを予防する」と「目の病気を予防する」）と結びつけた文章を読む条件と、2つのうちのどちらか1つと結びつけた文章を読む条件で、手段の道具性の知覚について評定させた。その結果、2つの目標と結びつけた条件の方が特定の目標に対する有効性が低く評価された。また、「書く」ことだけができるペンと「書く」だけでなく「レーザーポインター」としても使用できるペンの選択では、「書く」という目標を活性化した場合に1つの目標に有効とされたペンの方が選択されやすかった。

内発的動機づけのアンダーマイニング現象は、本来自らの興味や関心によって行っていた活動に対して外的な報酬を付与することで、その行動に対する興味や関心が低下することを指している。Lepper, Greene, & Nisbett (1973)の有名な実験は、お絵かきの好きな子どもにシールのような褒美を約束して絵を描いてもらうことで、その後の自由時間にお絵

かきをする時間が減少したことを報告している。この状況は、最初に「楽しむ」という目標とのみ結びついていた「お絵かき」という手段に、新たに「ご褒美をもらう」という目標を強制的に連合させたことによって、複終局性の関係が形成されたと解釈することが可能である。アンダーマイニング現象を、希薄効果によって「お絵かき」という手段の「楽しむ」という目標に対する道具性の知覚が低下したためお絵かき行動が減少した、と説明することができる。

ボランティア行動についての動機づけに関しても、目標—手段の階層構造の複終局性によって説明できる現象がある。ボランティア行動は、自分と直接利害関係を持たない他者の状態に対する利他的な関心に基づくと考えられる。このボランティア行動に対してなんらかの金銭的な報酬を支払うことは、本来「他者の幸福を増す」という目標と結びついていた（ボランティア）行動に、新たに「報酬の獲得」という目標を連合させて、複終局的な目標—手段関係が形成されたと解釈できる。実際、そのような状況では、ボランティア自身が報酬をもらうことに抵抗を感じたり、強く固辞することがある。これは「他者の幸福を増す」という目標と（ボランティア）行動の間の結びつきが弱まる希薄効果により、行動の利他的な意味が薄められることに対する反応として解釈することができる。アンダーマイニング現象は、報酬を予告しなければ事後的に与えても生じないが（Lepper et al., 1973）、上記のボランティアの反応は事後的に与えられても生じるように思われる。

3つ目の反終局性（counterfinality）では、一方の目標達成に有効な手段がもう一方の目標達成を阻害する関係にある（図1）。この状況では目標間に対立が生じていると考えられ、セルフ・コントロールを必要とする状況が含まれる。例えばダイエットしている人は、「体重を落とす」という長期的かつ重要な目標と「おいしいものを味わう」という即時的かつ重要でない快樂志向的な目標が対立している。「ケーキを食べる」という手段としての行為は、「おいしいものを味わう」という目標にとっては有効

であるが、「体重を落とす」という目標の達成を著しく妨げることから反終局性の関係にある。反終局的な目標—手段関係も手段の道具性に影響を及ぼすことが示唆されている。「良薬は口に苦し」ということわざどおり、苦い味の鎮痛剤の効果が甘い味の鎮痛剤よりも高く評価されることが明らかにされている（Kruglanski et al., 2015）。

ある目標を達成するための手段が別の目標達成に寄与する複終局的状況と別の目標達成を妨害する反終局的状況を比較するなら、たとえ手段の道具性の知覚が低まるとしても現実的には前者の方が個人にとって望ましいことは明らかである。先の「良薬は口に苦し」のような反終局性が手段の道具性の知覚に及ぼす影響の研究は、例えば、痛い、苦い、楽しくないといった、即時的かつ快楽的な目標を妨害する手段の特徴を用いている。しかし投資可能な時間や労力といった資源が限られている以上、異なる目標はそれらを奪い合っているという点で本質的に対立関係にあると言える。例えば勉強と部活の両立や仕事と家事の両立といった、両立の問題の形で語られる2つの目標の対立は至る所に見受けられる。この問題に対する複終局的な手段の存在は、この基本的な対立関係を解消させるという点で有効であることは間違いないはずであろう。

両立困難な目標対立の典型的なケースとして「自己」と「他者」をめぐる対立がある。例えば援助行動は常に利他的動機と利己的動機の葛藤のなかにある。「他者のため」に行われる援助行動やボランティア行動は、コストとして自分の時間と労力を費やすために、必然的に「自分のため」という目標を阻害する。しかし「困っている人を助けたい」という利他的動機で始めたボランティア行動が、結果的に自分の知識や経験を増やしたり、物の見方を広げたり、さらには自分を成長させたり、自分の存在意義を見出せたりと、ボランティア自身のためにもなっていると意識されるようになることがある（伊藤, 2011）。ボランティア行動開始時の「他者のため」という動機から活動継続を決める時の「自分のため」という動機への変化は、阪神淡路大震災の災害ボランティアの調査で認められている（大橋ら、

2003)。当初「他者のため」という目標とだけ結びついていたボランティア行動が、その経験を通して「自分のため」という目標とも結びついて、複終局的な階層構造に変化したと解釈することができる。ボランティア行動の長期継続者は、経験の浅いボランティアと比較して、ボランティアが自身に与える好ましい影響について認識していることを示唆する研究もある。この結果は複終局的な手段に対して行為者のコミットメントが増大するという知見とも一致する。

「自己」と「他者」をめぐる目標対立の別の例は達成行動に見つけることができる。個人にとって重要な価値はしばしば親のような重要な他者の影響を受け、その他者の価値を取り込み内面化していくことで獲得されることがある。その過程のなかで重要な他者によってそうあってほしいと期待される目標が、こうありたい、こうしたいと自分が選択する目標と対立することがある。例えば受験や就職といった人生の重要な場面で、親からの強い期待や明示されない潜在的な期待を感じながら、自分自身の本当にやりたいこととの間に葛藤を経験することがある。

伊藤（2006）は、大学生にこれまでの努力経験を振り返らせて、それが「自分のため」だったか、「周りの人のため」だったか、あるいはその両方かという観点で説明をするように求めた。その結果、一般的に努力は「自分のため」として語られるものの、「自分のため」と「周りの人のため」を対立させない形で自身の努力を説明する者がいることも明らかにされた。例えば高校3年間の勉強について「結果的には私が頑張ることで、進学してそれなりの所で自分のやりたいことをやってほしいという親の期待に沿うような形にはなっていた」と語ったり、「周りの期待のためにやってその結果自分のためだったんだなと後から付いてくる、頑張れるきっかけは周りの環境、みんなが頑張っている、頑張れよと言ってくれる」と振り返ったりと、他者の期待に応えることと自分自身のために努力することの間に葛藤がなく、むしろ両者が結びつけられて語られることがある。さらに大学生に理想の努力のあり方を説明させた場合でも、「メーカーに

入りたいので…会社の人がどうのこうのっていうよりは、世の中の人はどう喜ぶか、そのために自分がどれだけ頑張っているものが作れるか、でも結局は自分のためになる、どちらが先かは不明」と語る者がいた。

他者の期待に応えようという意識や自分を応援してくれたりサポートを与えてくれた相手への「恩返し」の気持ちで自らの課題達成に努力する動機づけである他者志向的達成動機は、「自分のため」に達成に動機づけられる自己志向的達成動機と区別することができる（伊藤，2010）。伊藤（2010）は他者志向的達成動機に対する態度を測定する尺度を作成し、因子分析の結果、「自己志向的動機の重視」、「他者志向的動機の重視」、「他者志向的動機の負担感」、「他者志向的動機の利己性の認知」、「自己・他者志向的動機の統合」の5つの態度因子を抽出している。このなかで「自己・他者志向的動機の統合」は、「周りの人のために頑張ったとしても、その人が喜んだりしてくれることが、結局は自分の満足感につながるものである」という項目例に代表される。これは「自分のため」と「周りの人のため」という2つの目標の双方に達成行動が寄与する複終局的状況が構成されていると解釈できる。

達成動機づけの目標理論では、達成の意味づけが異なる目標を区別する。代表的な Dweck の目標理論では、学習場面において自分の能力を高めることを目標とする学習目標（learning goal）と自分の能力に対する望ましい評価を得よう、あるいは望ましくない評価を避けようとする遂行目標（performance goal）を区別し、さらにそれぞれの目標の個人差傾向を測定する尺度を開発している。しかし両者の関係を問題にすることはなく、あくまで独立に他の変数との関連を検討している。「自己・他者志向的動機の統合」という達成動機づけの態度と測定は、同時に保持することが可能な2つの目標の関係性を問題としている点でこれらの目標理論の尺度とは異なる。ただしこの態度は達成動機づけをめぐる「自己」と「他者」という2つの抽象度の高い目標の関係に限定されている。

一方で個人的目標の研究では、個人が日常的に保持している目標を個性

記述的に収集する。研究者により提起される概念とその抽象度は様々に異なっている。例えば、Cantorらのライフ・タスク（life task）は、「人が、人生の特定の時期において、自分が取り組みその解決に精力を注いでいると見なしている課題」と定義される。Littleらのパーソナル・プロジェクト（personal project）は、「人がそれについて考え、計画を立て、実行し、（常にではないが）達成できるものごと」と定義され、より下位で具体的な目標と考えられる（角野，1993）。このような概念とその測定法によって、個人に固有の目標階層関係を記述できる可能性がある。

そこで本研究では個性記述的に目標を収集し、その関係性について目標階層構造の観点から検討することを目的とする。質的に異なる目標であっても、それらを同時に達成に導くような手段が存在する複終局的な関係であれば、この2つの目標は個々に資源を奪い合うような葛藤関係ではなく、統合されていると考えることができるかもしれない。複終局的な目標階層関係において目標間の葛藤が意識されず、あるいは複終局的でない目標間では葛藤が意識されることが確認できれば、目標階層構造に着目する動機づけへのアプローチの端緒を開くことができると考える。本研究では、研究参加者に自分に固有な目標や手段を産出させて、それをカード化することで視覚化する。その上でカードを分類させる作業を行わせて、目標—手段関係をも可視化する。その後で面接調査を通して目標—手段関係について説明を求めると同時に、目標間で感じられる意識的な葛藤の報告も求めて、両者の関係を検討する。また目標階層構造の個人差を比較可能な形で提示することを目指し、最終的に目標間の対立と葛藤、および統合の様態について検討する。

方 法

研究参加者

大学生4年生19名（男性14名；女性5名）。心理学の授業の受講者の

中から面接調査の協力者を募った。募集にあたっては謝礼が渡されることを明らかにした。なお参加者の1名は面接実施時の時間的制約によって価値と目標の関連づけに関する内容を確認できなかったため、この部分の分析のみ除かれた。

手続き

面接調査に入る前に、研究参加にあたっての参加者の権利、プライバシーの保護の仕方について説明し、参加者の口述内容についての録音の許諾を確認した。

目標内容の産出

参加者に対してこれから5年ないし10年先の自分にとっての目標を10個、市販の「単語カード」を利用した10枚のカードにそれぞれ1個ずつ記述させた。この目標について説明する際には、「5年先、10年先に自分がこれをしたい、こうなっていたい、こうありたい、あるいはこうならなければいけないといったこと」を記入するように教示した。すなわち行動と状態の理想・願望としての目標だけでなく義務的な目標も含めるようにした。これは義務的な目標が家族や重要な他者との関係から引き出され、自律的に選択される理想的な目標と対立することがあるため、そのような目標対立があった場合にそれを抽出できるようにするためであった。¹⁾

価値内容の産出

次に人生を生きていくにあたって大切にしていることを5個、先ほどと同じ5枚のカードにそれぞれ1個ずつ記入させた。「こういうふうに生きたいとか、こういうことを大切にしたいといった、あなた自身の価値観や

1) 目標内容の産出に先立って参加者に、現在を基点に前後1ヶ月の期間を指定して、現在意識的に行っている活動や行ってきた活動を20枚のカードに記述するように求めた。普段何気なく行っている行動や習慣となっている行動は除くように求め、行動にあたり計画を立てることなどが「意識的」の意味であると説明した。また活動を「やっていること、やりたいこと、やらなければならないこと」として説明し、やってしまったことも含めて挙げるように求めた。この「活動」に関連する以降の手続きと結果については本論文では報告しない。

生き方」といった表現も用いて補足的に説明した。以下では、先の「目標」に対応してこれらを「価値」と呼ぶこととする。10個という目標の数と5個という価値の数は、価値が目標の上位に位置するという前提のもとで数が少なくなるように便宜的に設定した。できるだけ規定の個数を挙げるように求めたため、その個数に達しなかった参加者はいなかった（ただし記入にかかる時間には参加者によってかなり違いがあった）。

目標の重要性評定

各内容をカードに記入した後で、10個の目標のカードを自分にとっての重要性に従って並べさせ、その後で重要性を「最も重要」から「ほとんど重要でない」までの5段階で評定させ、カードに記入させた。

価値と目標の関連づけ

続いて価値と目標の関連づけを調べるために、10個の目標のカードを参加者の前に広げた上で、価値のカードを1つずつ示して、その価値を充実させたり実現させるためにその達成が役に立つと考える目標を全て挙げさせた。そしてそれらの目標の有効性について5段階で評定させ、カードに記入させた。これを5個の価値のカードに繰り返した後で、それぞれの価値の実現に関連づけられた個々の目標がどのように役立つのかを説明するように求めた。

目標の実現可能性・自己志向性・他者志向性

10個の目標についてその実現可能性を5段階で評定させた。さらに各目標が「自分のため」であるかどうかの自己志向性の程度を、「むしろ自分のためにはならない」から「非常に自分のためになる」の5段階で評定させた。同様に各目標が「周りの人のため」であるかどうかの他者志向性の程度を「むしろ周りの人のためにはならない」から「非常に周りの人のためになる」の5段階で評定させた。

価値の充足度と葛藤

5個の価値について、現在それに従って生きている程度を価値の充足度として5段階で評定させた。最後に5つの価値の中で対立していたり、両

立が困難であるといった関係にあるものがないかを尋ね、対立関係にある場合にはその対立がどのようなものかを説明するように求めた。

結 果

目標の内容

19名より収集された190個の目標を内容に従って、(1) 仕事に関する目標（昇進や転職などを含む）（11%）、(2) 金銭や購入物に関する目標（貯金、車、家、海外旅行などを含む）（19%）、(3) 自己成長や技能獲得に関する目標（資格、英語、家事、健康などを含む）（18%）、(4) 将来設計に関する目標（ひとり暮らし、恋人、結婚、子どもなどを含む）（16%）、(5) 人間関係（親、友人、部下、上司との関係）と他者からの評価に関する目標（尊敬される、頼りにされるなどを含む）（20%）、(6) 抽象的内容（幸せ、充実、後悔しないなど）（4%）、(7) 具体的行動（猫を飼う、ライブに行き続ける、ゲームの大会にでるなど）（12%）の7つのカテゴリーに分類した（表1）。

目標の重要性・自己志向性・他者志向性の評定

カテゴリーごとに重要性評定の平均値を算出した。抽象的内容が最も重要性が高く（ $M=4.8$ ）、続いて仕事に関する目標が高かった（ $M=4.4$ ）。逆に金銭や購入物に関する目標が最も低く（ $M=2.8$ ）、続いて自己成長や技能獲得に関する目標が低かった（ $M=3.1$ ）。ただし金銭や購入物に関する目標でも、旅行や車などの購入物と比べて生活のためのお金や貯金の重要性は高く評定されていた。また自己成長や技能獲得に関する目標も標準偏差が大きく、参加者による評定の違いが大きかった。

目標の自己志向性、他者志向性については、カテゴリーごとと全体で平均値を算出した。目標全体では「自分のため」という自己志向的目標が多く挙げられており（ $M=4.0$ ）、「周りの人のため」と意識されるような他者志向的目標は少なかった（ $M=2.8$ ）。その中で「人間関係と他者からの

表1 目標のカテゴリーと例

カテゴリー	例
仕事	経営企画の仕事に携わる 友人と組んでビジネスをする 5～8年後を目安により安定・楽しく働ける所に転職する
金銭 購入物	貯金がしっかりある生活をした 居心地の良い家に住む 海外など色々なまだ行ったことの無い場所へ行きたい
自己成長	英語を会話できるようになりたい 料理やそれ以外の家事全般を一通りできるようにしておく 食べ過ぎ飲み過ぎで太らない
将来設計	1人暮らしをしたい 彼女、もしくは妻を見つけていたい 子どもにとって良い父親でありたい
人間関係	家族へ旅行をプレゼントする 先輩・上司から頼られる 期待される 社会人として自分自身が必要とされる人物になりたい
抽象的 内容	将来の自分にとってやりたいことをやっていること 幸せに暮らしている
具体的 行動	日本全国を旅していきたい 映画評論家ぶれるくらいの量の映画を見る 友だちとマンガをかく コミケとかにだす

評価に関する目標」は他者志向性が高く評価されていた ($M=3.9$)。

価値の内容

19名より収集された95個の価値を内容に従って、(1) 挑戦や自己成長 (13%)、(2) 一人の時間や趣味 (8%)、(3) 人間関係や他者に対する態度 (31%)、(4) 金銭・出世 (5%)、(5) 「自分に正直でいたい」、「悔いを残さない」など自分に向けられた意識や態度 (14%)、(6) 「時間を大切にす

る」など行動指針 (16%)、(7) その他 (14%) の7つのカテゴリーに分類した (表2)。

表2 価値のカテゴリーと例

カテゴリー	例
挑戦や自己成長	新しいことにチャレンジし続けている人でいたい 自分が興味があった物についてはほとんど勉強する 生活の安定も大事だが、それ以上に自分のやりがいや楽しさを大切にしたい
一人の時間や趣味	趣味にお金を使うこと 1人の時間・空間を常に持ち続ける
人間関係や他者に対する態度	適度に甘え、適度に頼り、頼まれたことは最後までする 自分を好きでいてくれる人達を大切にしたい 他人のために役立つこと
金銭・出世	お金に余裕がある生活をする 出世する
自分に向けられた意識や態度	最後、死ぬ時に人生をふり返って後悔を残したくない 自分の心に正直になること 先入観を持たない
行動指針	笑う門には福来る 嫌いなこと、いやなことは、最大限やらない 時間を大切にする
その他	健康な身体でいる 日本のことを幅広く魅力を見て感じて知っている人でいたい なんとかなる

価値と目標の対応づけ

価値の充実や実現に有効と認知された目標の対応づけは、目標階層構造における目標—手段の結合に対応する。この価値と目標の結合数について、目標1つあたりの平均値は1.6、標準偏差は0.9であった。また参加者ごとに目標1つあたりの結合数の平均値を算出すると、最大値で3.9、最小値で0.4あった。3名が平均値2.0以上であったのに対して、5名が1.0以下であった。3.9という最大値は目標と価値がほとんど対応づけられていることになる。一方、0.4という最小値は対応づけがほとんど見られないことになる。このように参加者間の差異が著しく大きかった。180個の目

標おける重要性評定と結合数の相関は .31 であり、価値と対応づけが多い目標ほど重要と評定される傾向が確認された。

続いて、1つの手段が2つの目標と結びついている複終局性の目標—手段関係、ここでは2つの価値が1つの目標を媒介してつながっているパターン、を参加者ごとにカウントした。参加者1名あたりの複終局性パターンの平均は14.6個、標準偏差が17.5個であり、こちらも参加者間の差異が大きかった。特に50個以上の参加者が2名おり、残りの16名が20個以下であった。

価値の葛藤の意識

18名中8名から9つの価値の葛藤が報告された（複数の価値を1つにまとめて別の価値と葛藤すると説明した場合には葛藤は1つとしてカウントしている）。人間関係や他者に対する価値と自己に向けられた価値の葛藤が4ケース挙げられた。この例としては、人へのやさしさと自分に正直であることの間葛藤や、他者との楽しい時間と自分の努力ややりがいの間葛藤などであった。この結果は自己と他者をめぐる価値の葛藤が典型的であることを確認している。また仕事と家庭、趣味と節約、「今を生きること」と「細かく考えること」、「自分の意見を言うこと」と「平和に過ごすこと」、「いろんなところに行くこと」と「家族を大切に作る時間をとること」の間で葛藤が指摘された。

複終局的な目的の内容

自己と他者をめぐる価値の葛藤の4ケースのうち2ケースでは複終局的な手段（目標）は報告されなかった。残りの2ケースでは複終局的な手段（目標）の存在が指摘された。「常に人にやさしくいれるようにしたい」と「自分に正直にいたい」という価値の葛藤では「今と変わらないくらいの友だちづきあいをしていきたい」（実現可能性3）、対人関係における充実と自分の楽しさ、やりがい、努力という価値の葛藤では「色々なジャンルで活躍する友人や知り合いと何か挑戦してみたい」（実現可能性3）が2つの価値の実現に有効な目標として挙げられた。

これ以外の5ケースの価値の葛藤のうち3ケースは、複終局的な手段（目標）は報告されなかった。「自分の意見をきちんと言う」と「平和に過ごしたい」という価値の葛藤では、「コミュ障害を治したい」（実現可能性2）と「良好な人間関係を築きたい」（実現可能性4）が両者に有効な目標として挙げられていた。また葛藤として仕事（「尊敬される上司になる」と「出世する」の2つの価値）と家庭（「自分の子どもに尊敬される親になる」と「子どもに不自由な生活をさせない」の2つの価値）を挙げた1人の参加者は、ほとんどの目的を価値と結びつけていたため、複終局的な目標が数多く見られる者であった。

自己と他者に関する価値の対立

次に葛藤が予想される自己に関する価値と他者に関する価値の複終局的な目標の有無を検討した。7つの価値のカテゴリーなかで「人間関係や他者に対する態度」と「挑戦や自己成長」、および「人間関係や他者に対する態度」と「自分に向けられた意識や態度」の中の自己に関連する価値の両方を挙げた参加者は8名であり、自己に関連する価値と他者に関連する価値の組み合わせは22組であった。先に述べたように、このうち4名の6組の組み合わせでは葛藤が報告され、さらにその中の2名の3組の組み合わせで複終局的な目標が存在していた。一方葛藤が報告されなかった組み合わせも7名16組のうち10組では複終局的な目標が存在していた。例えば、「縁を大切に生きていたい」という価値と「新しいことにチャレンジし続ける人でいたい」という価値の実現のための手段（目標）として「社会人として自分自身が必要とされる人物になりたい」（実現可能性3）という目標が結びつけられていた。「自分の心に正直になること」の価値と「他人のために役立つこと」および「人と良好な関係を築くこと」の価値の実現のために、いずれも「先輩・上司から頼られる、期待される」および「後輩に慕われる、尊敬される」という手段（目標）が結びつけられていた（実現可能性はいずれも3）。

考 察

本研究では、複終局的な目標階層関係においては質的に異なる目標が統合されることで目標間の葛藤が意識されにくいと仮定し、面接調査を通して個人に固有な目標と価値を産出させ、両者の関係づけを求め、目標階層関係によって明示された目標間の対立と統合の様態と目標葛藤の意識について検討した。

まず目標階層構造における目標—手段の結合数、すなわち本研究における価値と目標の対応づけの数は個人差が大きかった。結合数が少ない場合、価値を実現するための目標を保持していないと考えるなら、価値の実現が困難という点で適応的でないと言えるかもしれない。さらに結合数は複終局性パターン数にも影響するため、結合数が少ないと複終局性パターンも少なくなり、目標間に統合が見られないと判断されることになる。

価値の意識的な葛藤は19名中8名から9組が報告された。本来的に価値は個人のなかで長期的にゆっくりと作り上げられていき、さらには一見矛盾するような価値であってもそれら結びつける目標を通じて統合されていくと考えるなら、この数は価値の可能な組み合わせに比して少ないということもないかもしれない。また報告された葛藤も、自己に関連する価値と他者や人間関係に関連する価値をめぐる問題を中心に理解できる内容であった。ただ価値の葛藤が意識されるケースで目標階層において複終局性パターンが見られないという結果は明確には得られなかった。

自己に関する価値と他者に関する価値の双方を挙げた参加者の8名という数も評価は難しいが、価値の間の葛藤を捉える枠組みとして「自己」対「他者」の関係性は有効であることが示唆された。2つの一見対立する価値を複終局的な目標によって結びつけて説明する事例は、アイデンティティ発達における「自己」と「他者」の葛藤と統合のプロセスの理解において重要であると考えられる。

個性記述的な目標の収集とそれに基づく階層構造の測定の難しさも明らかにされた。参加者間の比較のためには産出される目標内容を抽象—具体性の水準で統一することが必要となる。今回の調査では、5～10年先の目標としてむしろ価値に近い抽象的な内容が挙げられたり、逆に価値の記述として具体的な記述がなされることもあった。このような場合には目標と価値の内容が重なってしまい、価値と目標を対応づける結合数が過大に評価されてしまうようであった。普段意識されていない場合には、具体的なレベルでの目標や抽象的な価値を表現することに慣れていないことも影響し、目標階層構造で研究者が想定するレベルでの回答を引き出すことは非常に難しく、手続き上の工夫を必要とする。実際、個人的目標研究では参加者に各研究者が想定する目標概念について十分に理解させた上で研究を進めている（角野，1993）。

また今回探索的に階層構造の複終局性の量的指標として価値—目標の結合数や終局性パターン数を目標（価値）間の葛藤の指標として取り上げたが、どちらも問題点が示唆された。この指標は個人差が大きく、特にほとんどの目標を価値と結びつけることで、その数が非常に多くなってしまう参加者が見受けられた。これには挙げられた価値や目標がもともと非常に類似していた可能性が考えられる。その一方で、終局性パターン数がない場合でも、価値の内容が類似しており、当事者も葛藤を報告しないケースもあった。複終局的な手段による異なる目標の実現という考え方は、その目標の内容が異なっており、時間や労力の配分という点で必然的に対立しているという前提がある。もし5つの価値が内容的に類似しているなら、複終局性パターンが多く見られ、対立が意識されていないとしても、複終局的な目標（手段）によって価値が統合されていると見なすのは適当とは言えないであろう。

上記のような問題点を踏まえて研究手続きについて考慮すべき点を指摘したい。1つめとして記述させる価値や目標の数がある。個人により重要な価値や目標は異なるが、重要な価値や目標のみを挙げてもらうという方

法では、研究参加に対する姿勢が反映されて積極的でない参加者では少なくなってしまう可能性があると考え、価値では5個、目標では10個（そして本論文では報告されていないが活動では20個）とあらかじめ数を設定し、その上で目標については重要性を評定してもらったこととした（価値については全て重要度の高いものという前提で重要性評定は行わなかった）。今回は重要性評定を利用して目標を選別することはしていないが、個人ごとの10個の目標の平均値は最大値4.1から最小値2.9に分布しており、重要な目標の多い参加者と重要性評定が分散する参加者が見られた。面接の実感においても目標（そして活動）の産出にあたっては規定の個数を挙げることに苦労している参加者が見受けられた。目標の産出が難しく比較的似たような目標が産出されると、価値との結び付きも類似してしまうことで、場合によっては結合数がかなり多くなり終局的な関係性が過大評価されることが危惧される。同じことは価値を産出することが困難で似たような価値を挙げてしまう場合にも当然ながら当てはまる。

2つめとして産出の順番がある。今回は、(活動、)目標、価値という順番で、具体的な内容から抽象的な内容へとボトムアップ式に回答を求めた。自分にとって重要な価値を先に挙げさせると、その影響で価値に対応する目標が産出されやすくなり結合数が多くなってしまうことを避けるためであった。しかし参加者間の目標の抽象—具体性の水準を統一するという要件のためには、まず重要性が個人間で共通するであろう価値を先に挙げてもらい、その後でトップダウン式に価値の実現に必要な目標を回答させ、その上でその目標が別の価値を促進するか、それとも妨害するかを尋ねる方が、個人間の水準を統一しやすく、階層構造の測定と個人間の比較という点では有効かもしれない。

引用文献

伊藤忠弘（2006）. 「最も努力した経験」における他者志向的動機の現れ方 帝京大学心理学紀要, 10, 27-44.

- 伊藤忠弘（2010）. 他者志向的達成動機の規定因としての親の養育態度と期待
青山心理学研究, 10, 1-16.
- 伊藤忠弘（2011）. ボランティア活動の動機の検討 学習院大学文学部研究年報,
58, 35-55.
- 鎌原雅彦・村守静子（2006）. 高校生の動機づけにおける媒介要因としての個人
的目標 人文, 5, 101-108.
- Kruglanski, A. W., Chernikova, M., Babush, M., Dugas, M., & Schumpe, B.
M. (2015). The architecture of goal systems: Multifinality, equifinality, and
counterfinality in means-end relations. In A. J. Elliot (Ed.) *Advances in
motivation science* (Vol.2, pp. 69-98.) Waltham, MA: Academic Press.
- Lepper, M. R., Greene, D., & Nisbett, R. E. 1973 Undermining children's
intrinsic interest with extrinsic rewards: A test of the overjustification
hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 129-137.
- 大橋健一・北風公基・佐々木正道・宗正誼・宮崎和夫（2003）. 阪神・淡路大震
災における大学生のボランティア活動に関する意識と実態 佐々木正道（編）大
学生とボランティアに関する実証的研究 ミネルヴァ書房
- 角野善司（1994）. 個人的目標研究の動向 東京大学教育学部紀要, 33, 117-124.
- Zhang, Y., Fishbach, A., & Kruglanski, A. W. (2007). The dilution model: how
additional goals undermine the perceived instrumentality of a shared path.
Journal of Personality and Social Psychology, 92, 389-401.

